

国際性を持つ医療従事者を志して

鈴木 康裕 先生

この度は、大変貴重なご講義をありがとうございました。医療を学ぶ学生として、先生が厚生労働省および WHO で培われた豊富なご経験に基づくお話を拝聴し、日本の医療を世界という視点から捉え直す貴重な機会となりました。

特に印象に残ったのは、厚生労働省における「減点回避・事前調整」を重視する行政文化と、WHO における「アピール」「規範設定」「政治的交渉」を軸とした意思決定の違いについてのお話です。同じ医療政策であっても、組織や立場が異なれば求められる能力や価値観が大きく異なることを知り、国際保健の現場では、科学的根拠だけでなく、交渉力や発信力も重要な要素であることを強く実感しました。

また、日本は国民皆保険制度やフリーアクセスといった優れた医療制度を有し、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)の実現において世界をリードしてきた一方で、多額の資金を拠出しながらも国際社会で十分な発言力を持っていない「サイレント・ドナー」という現状については、大変考えさせられました。日本の医療が高く評価されているからこそ、その知見や経験を世界へ積極的に発信していくことの重要性を改めて認識いたしました。

さらに、WHO のガイドライン策定や緊急事態宣言(PHEIC)の背景には、加盟国だけでなく、使途特定任意拠出を行う財団や各国政府、さらには製薬企業など、多様なステークホルダーの影響が存在することを伺い、医療情報やエビデンスを受け取る際には、その内容だけでなく、どのような立場や背景から発信されているのかまで含めて多角的に考察する姿勢の重要性を学びました。

今回の講義を通して、医療従事者には臨床能力や専門知識だけでなく、世界の医療政策や国際情勢を理解し、異なる価値観を持つ人々と議論し、協働できる力が求められることを強く実感しました。これから臨床検査技師として医療の現場に携わる中でも、目の前の患者様に最善の医療を提供することはもちろん、その医療が社会や世界とどのようにつながっているのかという視点を忘れず、広い視野を持った医療従事者を目指して研鑽を積んでまいります。

改めまして、ご多忙の中、大変示唆に富むご講義をご準備くださり、心より御礼申し上げます。
先生の益々のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

豊田慎一郎